

住職の佛教史

浄土真宗 (4)

第陸より京都五条西洞院に住む 京での生活は極度の貧窮と不慮の大災患信尼の帰郷など不幸であった
このような困難の中で『三帖和讃』を著し九十歳の時娘息子、門弟に看とられて住生した

弟子唯円によそよとめられた『歎異抄』には「ただ念佛して弥陀にたすけまおらすべしをよき人の仰を被りて信ずるほか別に子細なまなり」とその根本思想は「念佛と阿弥陀如来を信じること」を以て「善人なおも住生をとくいわんや悪人をや」と悪人こそ救済の正機であるとまげ到った

さらに「象生の救済は阿弥陀佛のはかりにまがされおものであつて 象生の方からはかりは不申なものと言つた浄土真宗の教えは、佛念は信じること第一としたため「信心念佛」といわれている

根本聖典は浄土三部經の『無量壽經』としこの經は阿弥陀佛の象生を救おうとする本願を説くことにありその名号こそ「南無阿弥陀佛」だとしその本願力は悪人であつさえも救うものであるといふ救へである

次回 浄土真宗の十派のうち血脈東西本願寺の二派を中心に

述べる

住職 仁阿

住職の佛教史

浄土真宗 (4)

常陸から京都五条西洞院に住む京での生活は、極度の貧窮と不慮の火災、恵信尼の帰郷など不幸であった。このような困難の中で「三帖和讃」を著し九一歳の時、娘、息子、門弟に看取られて往生した。

弟子、唯円によってまとめられた「歎異抄」には「ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべしをよき人の仰を被りて信ずるほかに別に子細なきなり」とその根本思想は、念佛と阿弥陀如来を信じること、そして「善人なおも往生をとぐいわんや悪人をや」と悪人こそ救済の正機であるとまで到った。さらに「衆生の救済は、阿弥陀佛のはからいにまかされるものであって、衆生の方からはからいはずは不用のものとまで言った。浄土真宗の教えは、”念佛は信じること第一”としたため「信心念佛」といわれている。根本聖典は、浄土三部経の「無量寿経」とし、この経は阿弥陀佛の衆生を救おうとする本願を説くことにあり、その名号こそ「南無阿弥陀佛」だとし、その本願力は悪人であつてさえも救うものであるという教えである。

次回は、浄土真宗の十派のうち血脈東西本願寺の二派を中心に述べます。